

view

視野

子どもが夢中で遊ぶ時

星三和子

(発達研究者)

「夢中になっている」とは、どんな状態だろうか。まず、大人の場合で考えてみよう。何かの活動に強い意欲をもって集中し、全力でエネルギーを注ぎ込んでいる、そんなイメージが一般的だろう。ただし、「夢中」から素晴らしい作品を創り出す芸術家もいるものの、たいいていの人は「ほどほど」という条件が付く。現実を忘れて夢中になるのは危険とみなされる。

子どもの「夢中」と保育者の評価

子どもの「夢中」の状態も大人と大差はない。幼稚園や保育園の生活の中で、例えば、園庭で友達とボールを全速力で追いかけている時。例えば、ブロックを倒れないように注意しながら高く積み上げている時。保育者の「○○ちゃん、夢中で遊んでるね」という発言は、たいていは褒め言葉だろう。なぜか。それは、夢中でいる子どもの内側で、集中力、意欲、自主性、探求心が発揮され、その結果、知識や学習方法が獲得され、自己充足感が得られ、これらすべてが子どもの全人的な発達に寄与するからである。

星三和子（ほしみわこ）

名古屋芸術大学名誉教授。専門は発達心理学。保育を子どもの発達の側面から見ているうちに、ヨーロッパ諸国の保育に関心が広がっている。

自分の世界に入り込んで現実を逃避する。危険な「夢中」の子がいないわけではない。しかし多くの保育者にとつて、「夢中」が気になる時はもつと日常的にある。例えば、ある子どもが砂場で夢中でトンネル掘りをしていて、「お昼ですよ」という先生の声も耳に入らない時。保育者は、夢中はほどほどに、保育者の声を聞いて遊びをやめるのを期待するだろう。つまり、大人の都合に従って、「半分ほどの夢の中」を求めることが多いのではなからうか。

あるいは、「コミュニケーション力」が過大評価される今日では、幼児も、友達と一緒に遊べること、集団に協調できることが称賛される。友達と一緒に夢中で遊ぶ子どもは高く評価されるが、一人遊びに夢中で友達が目に入らない子どもは否定的に受け取られがちである。つまり、個人の内側の強い集中と周囲の人との関係は、しばしば相いれない。保育の場では、そこに何らかの妥協点を見いださねばならないのである。

ピストイア市の保育で考えたこと

子どもが夢中で遊ぶ場面を見て、考えさせられたことがある。

私は八年来、イタリアのピストイア市の幼児学校（三〜六歳）および保育園（〇〜三歳）の観察を行ってきた。観察を始めた最初の頃、私は、子どもたちは遊びを楽しんでいるのだろうか？ と疑問に思った。大声で笑ったり、友達とふざけ合ったり、はしゃいだり、走ったり、という日本の子どもたちに比べて、何と静かなのだろう。ピストイア市の保育ではリサイクル品や筒のような素材を遊びに多用しているのだが、それが子どもたちには楽しくないのではないか、と思った。しかし、彼らの目は生き生きしているし、長時間遊んでいる。

何年かたつて、楽しいということは興奮することだけではないと気付いた。むしろ、遊びに没頭している時の子どもは静かであり、深く楽しんでいる時には笑わないのだ、と思えてきた。

例を挙げよう。ぬいぐるみを抱えた二歳児が、筒や梱包材料等の置いてある机にやって来た。三〜四本の金属性の工用コイルを組み合わせて、大きいコイルの中に小さいコイルを通そうとしたり、重ねたり、抜いたり、引つ掛かったコイルから形を作ったりと、いろいろ試した。なかなかうまくいかないこともあれば、うまくいくこともある。いつの間にか、ぬいぐるみは脇にやられていた。十分以上遊んだ後、少しほほ笑んで、「おしまい」とばかりに両手でコイルを押しやり、ぬいぐるみをつかんで、その場を離れた。それは、十分遊んでこれよし、といった「潔さ」を感じさせる終わり方だった。

同じようなことは五歳児でも観察した。男児数人が共同でブロックやチューブ等を並べて床に街を作った。一人がブロックを置くと、それに別の子が足して線路にしたり、塔を置いたり。互いに言葉を交わすこともいさかきもなく、個々の子どものイメージが継ぎ足されていった。出来上がった後、誰が言うともなく、あつという間に皆で全部を壊した。

全身全霊でエネルギーを出し尽くすという「夢中」を「動的な夢中」と名付けらるなら、それは毎日あるわけではない。一方、ある活動に没頭して自分なりに満足するという先述のような例は、いわば「静的な夢中」である。これは毎日の生活にも起こり得ることであり、保育者がこのような子どもの姿を見逃さないことも重要と思われる。

夢中になれるための保育環境

子どもが保育の中で夢中になれるためには、環境条件が要る。ピストイア市の子どもたちに与えられている次の環境は、日本でも十分考慮できる条件だと思われる。

・長く自由な遊び時間…午前九時半ごろの朝の会が終わってから昼食の十二時ごろまで、子どもたちは、一つの遊び場面で、たっぷり自由に遊ぶ。活動が時間でぶつ切りにされることがない。保育者は基本的には遊びを主導することではなく、子どもの主体性に任せる。

・落ち着いて美的な保育室…保育室は、子どもが安心して落ち着け、心地よく過ごせることが何よりも配慮されている。壁面はブルーや白あるいはパステルカラーの落ち着いた色。美的な配色と物の配置には、ごたごた感がない。また、音も静かで、スピーカーを通した音楽はなく、保育者の声も小さい。情緒の安定が確保されてこそ意欲も知的好奇心も喚起されるといえるが、環境に具現化されている。

・小グループ活動…クラスは五〜十人の小グループに分かれて活動する。保育者も各グループに一人。このこじんまりさが、子どもたちの友達とのやりとりにも、一人の活動でも、心の安定にはちょうどよい。

子どもが夢中になっている時は、子どもの内側の深いところで熱い動きがある。それは子ども同士の関係や活発な活動といった、外側から明白に見える行動にだけ目を向けてはわからないことである。内側の見えない動きをわずかにうかがわせる表情や身振りからキャッチする保育者の感受性が問われることでもある。